

古英語におけるゲルマン祖語の j-接尾辞の反映 Reflexes of the Proto-Germanic *j*-suffix in Old English

森 基雄
Motoo MORI

要旨

本稿では、ゲルマン祖語における語形変化に幅広く存在した j-接尾辞が古英語にどのように継承され、姿を変え、また j-接尾辞が引き起こした音変化が古英語においてどのように反映されているかについて、j-動詞（弱変化動詞 1 類と j-現在動詞）、ja-語幹名詞、jō-語幹名詞における実例を通して論じていきたい。

キーワード：西ゲルマン語の子音重複、音節接触法則、Sievers の法則

I. j-接尾辞が引き起こした音変化：西ゲルマン語の子音重複、i-ウムラウト、硬口蓋化

短音節語根に後続する j-接尾辞はその前位置の子音の重複を引き起こした。これが西ゲルマン語の子音重複 (West Germanic germination) と呼ばれるものである。この子音重複の終了後に古英語ではほとんどのケースで j-接尾辞は消失したが、r にはこの子音重複は起こらず、後続の j-接尾辞も維持された。

以下は j-動詞、jō-語幹名詞の例である：OE *scieppan* ‘to create’、OS *skeppian*、Go *gaskapjan*/OE *swebban* ‘to put to sleep’、OS *answebbian*、ON *svefja*；OE *sibb* ‘relationship’、OS *sibbia*、Go *sibja*/OE *settan* ‘to set’、OS *settian*、Go *satjan*；Gmc **setjanan* > OE *sittan* ‘to sit’、OS *sittian*、ON *sitja*/OE *biddan* ‘to ask’、OS *biddian*、Go *bidjan*/OE *scieppan* ‘to harm’、Go *skapjan*/OE *hrissan* ‘to shake’、Go *afhrisjan*/OE *weccan* ‘to awake’、OS *wekkian*、Go *uswakjan*/OE *leccan* ‘to lay’、OS *leggian*、Go *lagjan*；Gmc **legjanan* > OE *licgan* ‘to lie’、OS *liggian*/OE *hliehhan* ‘to laugh’、Go *hlahjan*/OE *þennan* ‘to stretch’、OS *thennian*、Go *ufþanjan*/OE *fremman* ‘to do’、OS *fremmian*、ON *fremja*；OE *graemman*、*gremman* ‘to irritate’、OHG *gremmen*、Go *gramjan*/OE *tellan* ‘to count；to tell’、OS *tellian*、ON *telja*；OE *hell* ‘hell’、OS *hellia*、Go *halja*/OE *erian* ‘to plow’、Go *arjan*；OE *nerian* ‘to save’、OS *nerian*、Go *nasjan*；OE *werian* ‘to defend’、OS *werian*、Go *warjan*。

j-接尾辞に起因する音変化としては子音重複に加え、語根母音 *ie*、*e*、*ae* (= [a]) は i-ウムラウトによる前母音化や上げの結果であり、*sittan*、*licgan* の語根母音 *i* もまた (IE *e* >) Gmc *e* が i-ウムラウトによる上げを経た結果も示している。さらに本稿でこれから実例として挙げていくことになる、j-接尾辞を有した古英語形の語根母音はすべて j-接尾辞に起因する i-ウムラウトの結果を反映するものである。

また古英語では軟口蓋子音 WGmc [-k-]、[-kk-]、[-g-] ([-ng-] における閉鎖音)、[-gg-]、[-g-] は j-接尾辞が後続していた場合には硬口蓋化され (>OE [-kʰ-]、[-kʰkʰ-]、[-ngʰ-]、[-gʰgʰ-]、[-g-])、さらにこれらは各々 -č- [-tʃ-]、-çc- [-tʃ-]、-ng- [-ndʒ-]、-çg- [-ddʒ-]、-g- [-j-] となった。以下にその例を挙げるが、これらは当然 i-ウムラウトの結果も示し、さらに子音重複を経ていたケースも含む：[-k-] > [-kʰ-] > -č- [-tʃ-]：OE *sēcan* ‘to seek’ (OS *sōkian*、Go *sōkjan*)；OE *drenčan* ‘to make to drink’ (OS *ordrenkian*、Go *dragkjan*) / [-kk-] > [-kʰkʰ-] > -çc- [-tʃ-]：OE *weccan* ‘to awake’ (OS *wekkian*、

Go uswakjan) / [-ng-] > [-ngʲ-] > -ng- [-ndʒ-] : OE mēgan ‘to mingle’ (OS mēgian) / [-gg-] > [-gʲgʲ-] > -çg- [-ddʒ-] : OE lečgan ‘to lay’ (OS leggian, Go lagjan) ; OE ličgan (OS liggian) ; OE byčgan ‘to buy’ (OS buggian, Go bugjan) / [-g-] > [-gʲ-] > -g- [-j-] : OE biečan ‘to bend’ (OS bōgian, ON beygja) ; OE byrgan ‘to bury’ (ON byrgja)。

II. j-接尾辞が引き起こした西ゲルマン語の子音重複とその原因について

短音節に後続していた j-接尾辞はその前位置の子音の重複を引き起こした。この子音重複の終了後は古英語では j-接尾辞は大部分のケースで消失しが、r にはなぜか子音重複は起こらず、j-接尾辞も維持された。

では、j-接尾辞による子音重複が起こった原因は何であろうか。そしてその一方で r の子音重複が起こらなかったのはなぜであろうか。この疑問には諸説あったようであるが、その最も注目すべきものは Murray & Vennemann (1983)、Murray (1986)、Murray (1988) の理論ではないだろうか。大まかに言えば、子音重複とその有無の根本的な原因はゲルマン祖語の段階での音節構造、そして語中の音節境界 (\$) を挟む両端の子音の強度値にあったという。そしてその前提として Murray & Vennemann (1983:518) はゲルマン祖語における音節の区切り方、すなわち分節 (syllabication) を支配する原理を明確に定義しており、*satjan ‘to set’ (>OE settan) を例にとると、その要旨は次のとおりである。単一語内において、核音となる 2 つの分節音間に境目の分節音群があり (*-tj-)、しかも核音となるその 2 つの分節音の第 1 分節音が短音で強勢を有する場合 (*sátjan)、その音群 (*-tj-) はその第 1 分節音のみが第 1 音節に属するように分節される (*-t\$j-)。そしてさらに Murray & Vennemann (1983:520) は子音重複の引き金となった原理を音節接触法則 (Syllable Contact Law) として提案しており、その要旨のとおりである。音節構造 A\$B (*sat\$jan の t\$j に当たる部分を指す) において境目の分節音群の中の A (=t)、B (=j) の子音強度値がそれぞれ a、b とすると、A\$B が好まれる度合いは b マイナス a の数値とともに増加するという。そしてその当然の結果として A\$B が変化しやすい傾向は a マイナス b の数値とともに増加する。

ここで鍵となるのが A、B の子音強度値である。Murray & Vennemann (1983:524)、Murray (1986:334) によると、各子音の強度値は次のとおりである: わたり音 j、すなわち j-接尾辞は 1、わたり音 w は 2、流音 r は 3、流音 l は 3、鼻音 m、n は 5、有声摩擦音は 6、無声摩擦音と有声閉鎖音は 7、無声閉鎖音は 8。なお、Murray (1986:334) はひとまとめに鼻音 m、n を N、有声摩擦音を Đ、無声摩擦音を Þ、有声閉鎖音を D、無声閉鎖音を T と表記している。そして C (子音) の種類ごとに j マイナス C の値を示すと、T\$j では -7、Þ\$j では -6、そして D\$j でも -6、Đ\$j では -5、N\$j では -4、l\$j では -3、r\$j では -2 となる。すなわち前記の OE erian、nerian、werian のような例では -2 という最も高い数値であったことから見て C\$j の中では r\$j が最も好まれ維持されやすかったと考えられる。逆に言えば、-2 よりも低い数値を有する C\$j はより維持されにくく、より好ましい方向に音変化しやすかったということになり、西ゲルマン語ではその音変化こそが子音重複であったという。すなわち子音重複により T\$j (-7) は T\$Tj (0) (*sat\$jan > *sat\$tjan > OE settan; *wak\$jan > *wak\$skjan > OE weccan)、Þ\$j (-6) は Þ\$Þj (0) (*skap\$jan > *skap\$stjan > OE scieppan)、Đ\$j (-5) は Đ\$Đj (0) (*bið\$jan > *bið\$djan > OE biddan; *sib\$jö > *sib\$bju > sibb; *lag\$jan > *lag\$gjan > lečgan)、N\$j (-4) は N\$Nj (0) (*fram\$jan > *fram\$mjan > OE fremman)、l\$j (-4) は l\$lj (0) (*tal\$jan > *tal\$ljan > OE tellan) となることで、悪いとされる音節構造が改善されたという。子音重複は重子音化だけではなく bj > bbj、gj > ggj (OS leggian) のように閉鎖音化も引き起こし、古英語ではさらに後続の j-接尾辞による重複閉鎖音 gg の硬口蓋化にもつながった (OE lečgan)。なお OE biddan の場合、Gmc ð は子音重複に先立ち閉鎖音 WGmc d となっていたとも考えられるため、OE biddan は D\$j (-6) > D\$Dj (0) の結果とも言えるであろう。

さらに j-接尾辞による子音重複を示す別の大きなグループとして ja-語幹の名詞と形容詞がある。

まず ja-語幹名詞の短語根形に由来するもので、例えば男性名詞の主格と対格の単数形 OE *seċġ* ‘retainer’ (Lat *socius*) のゲルマン祖語形は **sagjaz*、**sagjan*、そして中性名詞 *bedd* ‘bed’ (Go *badi*) の主格と対格の単数のそれは同形の **baðjan* であった。しかし **sagjaz*、**sagjan* は、j-接尾辞に後続していた *-az、*-an が子音重複に先立って消失したことに伴い j-接尾辞が i に母音化したため子音重複には至らず、どちらも WGmc **sagi* となり、EOE **seġi* > OE **seġe* となるのが本来の発達であったと考えられるのであり、同様に **baðjan* も WGmc **badi* > EOE **bedi* > OE **bede* となるのが本来の発達であったと考えられる。現に ‘bed’ の場合、古高地ドイツ語では重子音形 *betti* と並んで本来の発達形と思われる (WGmc **badi* >) *beti* という形も見られる。では古英語ではなぜ主格と対格の単数が重子音形となっているのであろうか。それは j-接尾辞の後位置に子音重複の段階で子音重複に不可欠な後続の母音要素を維持していた他の格形や複数形である本来の子音重複形 (例えば属格単数 WGmc **saggjas* > *seċġes*、与格単数 WGmc **saggiæ* > *seċġe*、主格複数 WGmc **saggjōs* > *seċġas*) への類推によるものである。

ところで Murray & Vennemann (1983)、Murray (1986) が規定した子音強度の目盛りに従うならば、j-接尾辞による子音重複を起こさない r よりも弱いとされる子音 w も r と同じく子音重複を起こさないことになるはずであるが、その規定に反して w の子音重複と思えるものが確認できるケースが西ゲルマン諸語に見られる。特に古英語に見られる例は次のとおりである。

まず **iwj* > **iwwj* とされる例について見てみよう。

中性 ja-語幹名詞でアングリア方言形の *gliowes* ‘mirth’ (属格単数)、*gliowe* (与格単数) の主格と対格の単数は子音重複には本来至ることのない Gmc **gliwjan* に由来し、そこから直接発達した本来の形は *gli* であった。そして *gliowes*、*gliowe* はそれぞれ子音重複の段階で子音重複に不可欠な j-接尾辞の後位置の母音要素が維持された本来の子音重複形 WGmc **gliwwjas* > **gliowjas*、**gliwwjæ* > **gliowja* の反映とされる一方、主格単数でありながら類推により子音重複形と同形となっている *gliow*、*glēow* という形も見られる。また本来の子音重複形 **gliwwj-* はウェストサクソン方言では **gliew-*、そしてのちに **gliw-* となるのが本来の発達であり、現にそこから導入されたと思われる -w を有する主格と対格の単数 *gliw* も見られる。

中性 ja-語幹名詞 OE *hiew* ‘form’ (Go *hiwi*) の場合もまた主格と対格の単数は子音重複には本来至ることのない Gmc **hiwjan* に由来するとされ、*hiew* は子音重複の段階で子音重複に不可欠な j-接尾辞の後位置の母音要素が維持されたことによる子音重複形 (**hiwwj-*) への類推によるものと考えられる。

弱変化動詞 1 類の WS *hlýwan* (<EWS **hliwjan*)、Angl *hlēowan* ‘to maku warm’ (ON *hlýja*) も同じく子音重複形で **hliwjanan* > **hliwwjan* > **hliuwjan* を反映するもののように見える。

ja-語幹形容詞の男性形と中性形の主格単数 OE *niewe* ‘new’ (OS、OHG *niwi*、Go *niujis*、Skt *návya-*、Lith *naújas*) の場合もまた子音重複には本来至ることのない Gmc **niwjaz*、**niwjan* だったのであり、これは **niwi* を経て *nī* となるのが本来の発達であり、現にそれは *nícenned* ‘newborn’、*nícumen* ‘newly come’ のような複合語に見られる。従って *niewe* は子音重複の段階で子音重複に不可欠な j-接尾辞の後位置の母音要素が維持された、主格単数以外の形 (**niwwj-*) への類推によるものと考えられる。そして **iww* は **iuw* を経て OE *iow*、そして i-ウムラウトにより *iew* となり、*niewe* に至ったとされる。

そしてさらに **awj* > **awwj* と子音重複とは無関係と思える **auj* のいずれを反映するのかがはっきりとしない弱変化動詞 1 類 OE (Angl) *strēġan* ‘to strew’ (OHG *strouwen*、Go *stráujan*)、jō-語幹名詞 OE *ieġ* ‘island’ (OHG *ouwa*)、中性 ja-語幹名詞 OE *hieġ* ‘hay’ (OHG *houwi*、*hewi*、Go *hawī*) のような例もある。

これらの古英語形は **awj* > **awwj* を反映するものではなく、子音重複とはそもそも無関係な **auj-* を反映しているように見えることは確かである。すなわち *strēġan* は Go *stráujan* そのものと同一の WGmc **straujan* が **strēajan* >

(i-ウムラウト) *strēgan* という音過程を経た結果であり、同じく *īeg* ‘island’ は Gmc **aujō* > WGmc **auju* > **ēaju* > (i-ウムラウト) *īeg* という音過程の結果であると解釈できる。そして *hīeg* の場合、Gmc **haujan* > WGmc **hawi* > (アングロ・フリジア明音化) **hæwi* > (i-ウムラウト) **hewi* > **hewe* (> **heowe*) となる本来の発達のはずであるが、実際には主格と対格の単数以外の形、すなわち **hauj-* の後位置の母音要素を最後まで維持していた属格単数 *hīēges*、与格単数 *hīēge* (Go *háuja*) のような形の影響で *hīeg* に置きかえられた結果であると考えられる。しかし *jō*-語幹名詞の主格単数形 OE *īeg* ‘island’ はそのような影響とはまったく無関係な本来の発達形である。

strēgan、*īeg* の同族語である OHG *strouwen*、*ouwa* は明確に **awj* > **awwj* を反映しており、*hīeg* の同族語である OHG *houwi*、*hewi* のうち *hewi* は子音重複を示さない本来の主格と対格の単数であるのに対し、*houwi* は明らかに主格と対格の単数以外の、本来の子音重複形の影響によるものである。

Hogg & Fulk (2011:272) は *hlýwan* については *w* の子音重複以外の可能性もあるとしている。すなわち *hlýwan* は子音重複を反映するものではなく、子音重複とはそもそも無関係な **hliujan* だったのであり、不定詞 *hlýwan* の *w* はそれが直説法現在の 2 人称単数 **hliwis*、3 人称単数 **hliwip* から類推的に導入されたことによる **hliuwjan* を反映している可能性もあるとしている。さらに Hogg & Fulk (2011:272) は *strēgan* もまた *w* の子音重複とは無関係な、ゴート語形に等しい **straujan* に直接由来するとしている。

では古英語ではなぜ **awj* > **awwj* > OHG *ouw* に対応する反映ではなく子音重複とは無関係な **auj* の反映と思える結果を示しているのだろうか。この点について Ringe & Taylor (2014:53) は、Gmc **awj* は子音重複により表層レベルではいったん WGmc **[aw^w]* とはなっていたものの、基底ではまだ **[awj]* のままであったため、表層レベルでの子音重複後も基底の **[awj]* から表層レベルでは子音重複とは別の、Pre-OE **[auj]* への音変化が起こった結果かもしれないとしている。

だとすれば、**awj* が **auj* となったように **iwj* が **iuj* となることはなかったであろうか。

Gmc **gliwjan* ‘mirth’ の場合、前記の *gliowes*、*gliowe*、*gliow*、*glēow* のような *w* で終わる形以外のものも存在し、その形成過程についてはさまざまな可能性が考えられるのであり、さらに *gliowes*、*gliowe*、*gliow*、*glēow* の形成過程についても別の可能性が考えられるかもしれない。属格単数 *gliēges* については、Ringe & Taylor (2014:53) が提案した **awj* > **auj* と同様のことが **gliwjas* にも起こることによって子音重複とは無関係な **gliujæs* となり、それがさらに **gliojæs* > **gliēges* > *gliēges* となった可能性もあるかもしれない。もしそうであれば、*w* を有する属格単数 *gliowes*、与格単数 *gliowe* のような形は子音重複を反映するものではなく、Hogg & Fulk (2011:272) が提案した前記の *hlýwan* のケースに似て、主格と対格の単数のかつての本来形で *w* をまだ維持していた段階の **gliwi* から *w* を **gliuj-* が類推的に取り入れて **gliujw-* を形成し、それが主格と対格の単数 *gliow*、*glēow* のベースとなった可能性も考えられる。そしてさらに本来形 (**gliwi* >) *gli* の末尾に属格単数 *gliēges* から *j*-接尾辞の反映 *g* が類推的に付加されて形成されたと思われる主格と対格の単数 *gliēg* も見られる。

あるいは子音重複が起こったということを前提とするなら、子音重複形 **gliujw-* を継承する属格単数 *gliowes*、与格単数 *gliowe* が **gliujwæs*、**gliujwæ* のように *j*-接尾辞をまだ維持していた段階でそこから本来形 *gli* が *j*-接尾辞を類推的に末尾に再導入した結果が *gliēg* であり、さらにそこから属格単数 *gliēges* が形成されたのかもしれない。

従って ‘mirth’ には **gliujw-*、**gliuj-* という 2 つのベースがあったとも考えられる。

そして中性 *ja*-語幹名詞の主格と対格の単数 *hiw* ‘form’ (Go *hiwi*) の場合も子音重複に先立って **hiwi* となり、さらに **hi* となるのが本来の発達のはずである一方、主格と対格の単数以外の子音重複が起こる形においては *w* を反映しない **iuj* となることはなかった。しかし仮にもし Ringe & Taylor (2014:53) が提案した **awj* > **auj* と同様のことが **iwj* にも起こることにより **iuj* となっていたならば、**hiwjan* は **iuj* > **ioj* > **īeg* という音過程を反映する

*hieg、すなわち hieg ‘hay’ と同形になってしまっていたであろう。あるいは Hogg & Fulk (2011:272) が提案した前記の hl̥wān のケースと同じく hiew は、主格と対格の単数 *hiwjan がまだ w を維持した *hiwi であった段階で主格と対格の単数以外の (*hiwj->)*hiuj- が *hiwi から w を類推的に取り入れて形成された *hiuwj- がベースとなったのかもしれない。

では niewe ‘new’ は子音重複を反映する例と言えるのであろうか。これについてもまた同様にそうではない可能性について考えてみたい。niewe は子音重複を反映しないという前提に立つならば、同じく Hogg & Fulk (2011:272) が提案したような過程か、あるいは上記の *iwj>*iuj という音過程を経て形成されたとも考えられる。ところで同じ ja-語幹に由来するものでありながら、hiew は子音である w で終わっているのに対し、niewe ‘new’ が (*-i>)-e を末尾に有しているのはなぜであろうか。ja-語幹の場合、元来 (*-i>)-e はゲルマン祖語の段階で長語根形の主格と対格の単数では *andijaz、*andijan>*andi>ende ‘end’、*wilbijaz、*wilbijan>*wildi>wilde ‘wild’ のように Sievers の法則による j>ij という変化が起こっていた場合に限定されているはずである。Campbell (1959:269) もこの点を疑問視しており、Brunner (1965³:240) もこれはまるで長語根形に由来するかのような現象であるとしている。すなわち niewe の場合、子音重複に由来する WGmc *-ww- ではなく、あたかも Gmc *-ww- を有していたかのように長語根形 Gmc *niwwjaz、*niwwjan が Sievers の法則による *niwwijaz、*niwwijan を経て両者とも WGmc *niuwi となり、さらに *niuwi>*niowi>niewe という規則的な音過程を経た結果であるかのようにも見えるのであるが実際にはそうではなく、子音重複後に本来の長語根形と同一視されて長語根形のグループに移行したからなのであろうか。

Murray & Vennemann (1983)、Murray (1986) の見方とは逆に、w は r よりもきこえ度の低い、すなわち強度値の高い子音であり、j-接尾辞による子音重複を受ける強度値を有していたと主張しているのが Suzuki (1989) である。古英語に関し Suzuki (1989:23, 29-30) はその根拠として次の点を挙げている。まず、初期のゲルマン語の頭韻詩では wr-と wl-が w-と頭韻を踏むが、これは A が B よりもきこえ度の低い他の AB-音結合の場合と同じパターンであるという。従って w は r のみならず l よりも強度値の高い子音であったと考えられるのであり、さらに注目すべきなのは写本における子音結合の分節のされ方である。そこでは -CC- が同音節である度合いは -Cr-、-Cl-、-Cw- の順に減少し、しかも -Cw- は分節されるケース (-C\$w-) がほとんどであるという。このことは Murray & Vennemann による音節接触法則の観点からも w は流音よりもきこえ度の低い、すなわち子音強度が高いことを示していると言えるのであり、Gmc *-wj->WGmc *-wwj- を裏付ける根拠となるであろう。従ってこれまでの事例における j-接尾辞の前位置の *-ww- は Hogg & Fulk が hl̥wān について提案したような混成によるものではなく、Suzuki の主張を踏まえるなら、Murray & Vennemann が規定した w と流音との強度関係を見直すことで音節接触法則を改めて正当化することができるであろう。

III. ja-、jō-語幹名詞における j-接尾辞と Sievers の法則

ゲルマン語派では Sievers の法則により長語根の後位置の j-接尾辞が前述の Sievers の法則により *-ij- となっていたことは明らかであるが、古英語ではそれがどのように反映されているのであろうか。古英語においてその反映が最も明確に確認できるものとして、まず ja-語幹名詞に注目したい。

ja-語幹名詞の長語根形は男性形 OE ende ‘end’、hierde ‘shepherd’、中性形 wite ‘punishment’ のように末尾に -e を有する。すなわち主格単数で示すと、ende は Gmc *andjaz > (Sievers の法則) *andijaz > WGmc *andi > OE ende (OS endi、Go andeis)、hierde は Gmc *herðjaz > (Sievers の法則) Gmc *herðijaz > WGmc *hirdi > OE hierde (OS hirdi、Go háirdeis)、wite は Gmc *wītjan > (Sievers の法則) *wītjan > WGmc *witi > OE wite (OS witi) という音過程の結果である。しかしもし仮に Sievers の法則がなければ、Gmc *-jaz はまず Gmc *-j を経て WGmc*-i となり、

さらにこの *-i は消失し、‘end’、‘shepherd’、‘punishment’ はそれぞれ OE *end、*hierd、*wīt となってしまうはずである。また同じことは wilde ‘wild’ のような ja-語幹形容詞の長語根形についても言える。

そして音韻法則に一見反するかのように見えるものの、Siewers の法則によるかつての *-ij- の存在に起因すると仮定することにより説明がつくと考えられる例がある。それは wīte の主格と対格の複数 wītu、形容詞 wilde の女性形の主格単数と中性形の主格と対格の複数 wildu のように長語根の後位置でありながら -u を維持している例である。末尾の -u は、中性 a-語幹名詞の短語根形 scīp ‘ship’ の主格と対格の複数では scīpu のように維持されたのに対し、長語根形 word ‘word’ のそれでは *wordu > word のように -u は消失するというのが本来の発達である。また同じことは Siewers の法則の終了後に西ゲルマン語の子音重複により長くなった中性 ja-語幹名詞の例えば cynn ‘race’ の主格と対格の複数 (Gmc *kunjō > WGmc *kunnju >) *kynnu > cynn、jō-語幹名詞 sibb ‘relationship’ の主格単数 (Gmc *sibjō > WGmc *sibbju >) *sibbu > sibb についても言える。

これは Campbell (1959:146, 224)、Murray (1986:343)、Murray (1988:171)、Adamczyk (2001:64–65)、Hogg & Fulker (2011:21) も指摘しているように、ja-語幹名詞の長語根形 wīte の主格と対格の複数 wītu に残る -u はかつての Siewers の法則による (*-jō > *-ijō >) *-iju であったことに起因するものと考えられる (同じことは wildu についても言える)。すなわちゲルマン祖語の段階から長語根形であった *wordu も子音重複により長音節形になった *kynnu、*sibbu もともに -u を失ったのに対し、wītu に至る前段階であった (*wītjō > (Siewers の法則) *wītijō >) *wītiju のような 3 音節構造では -u は維持され続け、やがて Siewers の法則は終結すると *wītiju は *wītju となり、wītu に至った。なお *wītiju が *wītju に至ったようなケースの語中の i の消失を Hogg & Fulker (2011:21) は high vowel syncope と呼んでいる。

ja-語幹名詞の長語根形 ende の場合、主格と対格の単数では Siewers の法則のなごりである末尾の -e を維持しているのに対し、他の格形や複数形では前記の wītu と同じ音過程により、属格単数 *andijas > *andjas > endes、与格複数 *andijum > *andjum > endum となり、j-接尾辞のなごりは i-ウムラウトのみで、Siewers の法則のなごりは完全に消失している。

ja-語幹名詞は短語根形で語根末子音が r であった場合、j-接尾辞は主格と対格の単数 (Gmc *harjaz、*harjan > WGmc *hari >) OE here ‘army’ のように *-az、*-an の消失により末尾に位置するようになると -i に母音化し、OE -e として残ったが、j-接尾辞に後続していた母音要素が維持された例えば与格単数 herge (Go harja)、主格複数 hergas (Go harjōs)、与格複数 hergum (Go harjam) では j-動詞の場合と同様 r の子音重複はなく、j-接尾辞を反映する ġ も維持された。他方、語根末子音が r 以外のものであった場合は前述のように子音重複が起こり、その原因となった j-接尾辞は消失した。

そして wītu、wildu と同じく Siewers の法則による (*-jō >) *-ijō > *-iju を元来有していたと考えられるのが jō-語幹名詞の長語根形であり、aetgāēru ‘spear’ はその確かな例であろう。しかし bend ‘fetter’ (Go bandi)、gierd ‘rod’ (OS gerdia、OHG gertia、gart) では本来は同じくあるはずの -u はなぜか見られない。しかも Ringe & Taylor (2014: 15) の記述を踏まえるなら、語尾の失われた OE bend と語尾 -i を有する Go bandi は実は音韻法則的には完全な対応形なのである。そして Go bandi が本来 j-接尾辞を有した jō-語幹に属するものであったことは主格と対格の単数以外の活用形で j-接尾辞を明確に反映する属格単数と主格と対格の複数 bandjōs、与格複数 bandjōm などからも明らかである。また gierd についても主格単数以外では Go bandi と同様に jō-語幹として本来の形を有している。しかし主格単数語尾が (*-jō >) *-ijō > *-iju であったなら、OE gierd、bend、Go bandi ではなく OE *gierdu、*bendu、Go *bandja となっていたはずである。Fulk (2018:157) が述べているように、Gmc *-jō は IE *-jeH₂ > *-jā に由来するのに対し、Go -i はゼロ階梯の IE *-jH₂ > *-iH₂ を反映する *-i に由来するものと思われる。まず ‘fetter’ について言

例えば、(IE *bhondhiH₂ > *bhondhī >) Gmc *bandī から *-ī が短音化した実証形が Go bandi であり、OE bend はその *-ī が短音化した WGmc *bandi が i-ウムラウトと *-i の消失を経た結果である。そしてゲルマン語派以外のこれに相当するケースとしては Skt dēvās ‘god’ に対する女性形 dēvī ‘goddess’ を挙げることができるのであり、しかもその属格単数は IE *-jā- を反映する dēvyās である。また ġierd、そして OHG gart も、Gmc *gazdaz (ON gaddr, Go gazds) が西ゲルマン語の段階で語尾としては *-jō のゼロ階梯 *-ī が短音化した反映である *-i を取るようになったこと、そして語中の Gmc z が r となったことによる WGmc *gardi を規則正しく反映したものである。なお、同族語の OS gerdia、OHG gertia はストレートに Gmc *-jō- を反映したものである。

ところで bend、ġierd も ja-語幹の ende も長語根形であり、どちらもかつては末尾に *-ī を有していたのであるが、古英語形では両者の間に -e の有無という違いが生じているのはなぜであろうか。Ringe & Taylor (2014:15) によれば、それは bend、ġierd に至る音過程が Gmc *bandī、*gardi > WGmc *bandi、*gardi > OE bend、ġierd であったのに対し、ende に至るそれは Gmc *andjaz > (Sievers の法則) Gmc *andijaz > WGmc *andi > OE ende であったからである。すなわち WGmc *-ī と WGmc *-i のどちらを有していたかによる違いの結果ということになる。

IV. j-動詞における j-接尾辞の状況：Sievers の法則を中心に

ja-、jō-語幹名詞に劣らず j-接尾辞の影響が大きかったのが、①弱変化動詞 1 類、② j-現在動詞 (強変化動詞 5 類、6 類、7 類の一部を構成する、例えば sittan ‘to sit’ (ON sitja)、biddan ‘to ask’ (Go bidjan)、sċieppan ‘to create’ (Go gaskapjan)、hebban ‘to raise’ (Go hafjan)、wēpan ‘to weep’ (Go wōpjan) など) から成る j-動詞である。j-動詞のゲルマン祖語における現在時制の構造としては大まかに言えば、Go nasjan ‘to save’ (OE nerian)、Go dōmjan ‘to judge’ (OE dēman) のように語根と語幹形成母音 (thematic vowel) との間に j-接尾辞を有していた。j-動詞の現在時制における j-接尾辞が引き起こした音変化で古英語においてははっきりと確認できる主なものは、i-ウムラウト、r を除く語根末子音の重複、軟口蓋子音の硬口蓋化である。そして ja-、jō-語幹名詞と大きく異なるのは、古英語では j-接尾辞の Sievers の法則による (*-j- >) *-ij- の痕跡が完全に失われてしまっている点である。ゲルマン祖語の段階で長語根形において Sievers の法則が働いていたことは、ゴート語の dōmjan の直説法現在 2、3 人称単数 (Gmc *dōmjizi、*dōmjiði > *dōmijizi、*dōmijiði >) dōmeis、dōmeiþ でははっきりと確認できるのに対し、古英語では dēmst、dēmp (OS giduomis、OHG tuomis、tuomit) のように Sievers の法則の痕跡はもちろん j-接尾辞も、またさらに j-接尾辞と人称語尾 -st、-þ との間にあったはずの語幹形成母音 *-i- の反映も失われている。なお不定詞もかつては Sievers の法則の影響を受けた *dōmijan であったと考えられるが、前記の wite ‘punishment’ の主格と対格の複数に起こった wītiju > *wītju の場合のように Hogg & Fulc (2011:21) が high vowel syncope と呼ぶ音変化により *dōmjan (> Go dōmjan、OS dōmian、OE dēman) となったと考えられる。

これに対し、Go nasjan のような短語根形の場合、直説法現在 2、3 人称単数では nasjis、nasjiþ が示しているように、Sievers の法則が働くことはなかった。そして西ゲルマン語では *-is、*-iþ の前では j-接尾辞は消失し、さらに古英語では nerest、nereþ (OS neris、nerid) のように語幹形成母音 *-i- が -e- に弱化した。そして子音重複が見られる fremman ‘to do’ の直説法現在 2、3 人称単数の場合、*framjis、*framjiþ の段階で *-is、*-iþ の前位置の j-接尾辞が子音重複に先立って消失したため子音重複は起こらず、(*framis、*framīþ >) frem(e)st、frem(e)þ となった。

しかしゲルマン語派の j-動詞を、このようにゴート語形でのような単純に語根の音量による Sievers の法則の有無が生じるようになる前の印欧祖語の段階までさかのぼると、実はゲルマン語派のこうした j-動詞というグループの成立に至るまでの間に、また別の意味で Sievers の法則に関連した複雑な現象が起こっていたと思われるのである。そして実はこのことこそがゲルマン語派の j-動詞というひとまとまりのグループの形成につながったものと考え

えられる。

Brunner (1965³: 310) は、j-動詞の中でも弱変化動詞 1 類の j-接尾辞の IE *-ej- がゲルマン祖語では *-ij- となり、それが短語根の後では *-j- となった一方、長語根の後では *-ij- のままだったのであり、直説法現在 2、3 人称単数のようにこの *-ij- に語幹形成母音 *-i- が後続して *-iji- となっていた場合、この *-iji- は *-i- となったとしている。そしてこの *-i- は前記の Go *dōmeis*, *dōmeip* における -ei- [-i-] に残っている。Brunner のこの記述は要点を的確にとらえているが、本稿ではさらにその詳細に踏み込んでいきたい。

j-動詞の中でも特にその起源について注意を要するのが弱変化動詞 1 類であり、弱変化動詞 1 類の起源となったものとしては名詞に由来するもの（形容詞由来のものを含む）と使役動詞に由来するものがある。

ゲルマン語派以外の語派でこれに相当するものとしては例えば Gk *philos* ‘dear’ に由来する (IE **bhilejō*H₂>Gk **philejō*>) *philō* ‘I love’、Skt *dēvās* ‘Gott’ に由来する Skt *dēvayāti* ‘verehrt’ がある。これらはいずれも o-語幹名詞の語幹形成母音 IE *-e/o- のうちの *-e- プラス IE *-jé/ó-、すなわち IE *-e-jé/ó- が語根に後続して形成されたものである。古英語でこれに相当ものとしては o-語幹名詞と i-語幹名詞に由来するものを挙げておきたい。o-語幹名詞由来のものは OE *dēman* ‘to judge’ (Go *dōmjan*) があり、そのもとになった名詞が (IE **dho*H₁.*mos*>Gmc **dōmaz*>) OE *dōm* ‘judgement’ (Go *dōms*) として確認できるのであり、従ってこれは理論的には IE **dho*H₁.*me-jé/ó*->Gmc **dōme-je/a-*>**dōmi-ji/a-* を反映するものと言える。また i-語幹名詞に由来するものとしては (Gmc **wāniz*>) OE *wēn* ‘hope’ (Go *wēns*) に対する (Gmc **wāni-je/a-*>**wāni-ji/a-*>) OE *wēnan* ‘hope’ (Go *wēnjan*)、(Gmc **matiz*>) Go *mats* ‘food’ に対する (Gmc **mati-je/a-*>**mati-ji/a-*>) Go *matjan* ‘to feed’ がある。

そして OE *settan* ‘to set’ (Go *satjan*)、OE *wierdan* ‘to corrupt, to spoil’ (Go *frawardjan*)、OE *nerian* ‘to save’ (Go *nasjan*)、OE *lečgan* ‘to lay’ (Go *lagjan*) のような使役動詞由来のものは o-階梯の語根に IE *-éje/o- が付加されて形成されたものである。すなわち *settan* は IE **sodéje/o-* (Skt *sādáyati*) に、*wierdan* は IE **wortéje/o-* (Skt *vartáyati*) に、*nerian* は IE **noséje/o-* に、*lečgan* は IE **loghéje/o-* に由来する。

さらに j-動詞には語根に元来じかに j-接尾辞が付加されて形成されたグループも存在した。それは弱変化動詞 1 類の中でも過去形と過去分詞の形成において歯音接辞は伴うが j-接尾辞が母音化された反映 *-i- の痕跡のないもの、そして強変化動詞としてアプラウトにより過去形と過去分詞を形成する j-現在動詞であり、これらは primary verb と呼ばれる。弱変化動詞 1 類に属する前者のその代表的なものとしては OE *wyrčan* ‘to work’ (OHG *wurchen*, Go *waúrkjan*)、OE *byčgan* ‘to buy’ (Go *bugjan*) などがあり、OE *wyrčan* は IE **wrgjonom* (Av *vərəzeyeiti*)>Gmc **wurkjanan*> (Sievers の法則) Gmc **wurkjanan* に由来する。その過去形と過去分詞は、j-接尾辞が母音化された反映 *-i- とそれによる i-ウムラウトを有した OE *nerian* の過去形 *nerede*、過去分詞、*nered* (Go *nasida*, *nasip̄s*)、OE *dēman* の過去形 *dēmdē*、過去分詞 *dēmed* (Go *dōmida*, *dōmip̄s*) とは異なり、i-ウムラウトのない OE *worhte*、*worht* (Go *waúrhta*, *waúrhts*)、OE *bohte*、*boht* (Go *baúhta*, *baúhts*) である。しかもこれらは過去形と過去分詞の歯音接辞に後続していた母音要素に起因する u>o の a-ウムラウト (**wurht*->*worhte*, *worht*; **buht*->*bohte*, *boht*) を示している。そして primary verb の中でも特に OE *wyrčan*、OE *sittan* ‘to sit’ (ON *sitja*)、OE *hebban* ‘to raise’ (Go *hafjan*) の場合、j-接尾辞が語根に元来じかに後続していたことは各々その同族語である Av *vərəzeyeiti*、(IE **sedjomai*>) Gk *hézomai*、Lat *capiō* ‘I take’ によってはっきりと確認できる。

j-動詞のうち o-語幹名詞と使役動詞に由来するものの場合、語根後位置の要素は IE *-ejé/ó-、*-éje/o- からどちらも Gmc *-eje/a- を経て *-iji/a- となり、i-語幹名詞に由来するものの場合、IE *-ijé/ó- から Gmc *-ije/a- を経て *-iji/a- となった。この過程を使役動詞 ‘to set’ で示すと、IE **sodéje/o-*>Gmc **sateje/a-*>**satiji/a-* となる。すなわち IE *-ejé/ó-、*-éje/o-、*-ijé/ó- はいずれも、しかも語根音節の長短とは無関係にいったんは Gmc *-iji/a- となったため、

いったんは Sievers の法則に反し短語根の後位置にも Gmc **-iji/a-* が後続するという状況が生じていたと考えられる。他方、primary verb のグループでは j-接尾辞が語根に元来じかに後続していたため、Gmc **bug-ji/a-* ‘to buy’、Gmc **wurk-iji/a-* ‘to work’ のように j-接尾辞はもっぱら Sievers の法則のみによる交替 **-j- ~ *-ij-* を有していたと考えられる。従って Fullerton (1977:8) が述べているように、o-語幹名詞由来のものも i-語幹名詞由来のものも使役動詞由来のものも語根後位置の要素はすべていったん Gmc **-iji/a-* となったが、やがて語根後位置の要素は基底レベルでは語根音節の長短とは無関係に新たに一律に **/-j-/* となり、この **/-j-/* は表層レベルでは primary verb の場合と同様にもっぱら Sievers の法則による交替 **-j- ~ *-ij-* を示すようになったと考えられる。

しかしここで特に注目すべきこととして、短語根の後位置にあった (IE **-ej-*、**-éj-*、**-ij->*) **-ij-* が Sievers の法則による **-j-* と **-ij-* の分布の規則に従い新たに **-j-* となって現れるようになったのであり、短語根の後位置にあった **-ij-* が **-j-* となるということは Sievers の法則とは逆の現象とも言える。これを Edgerton (1934) は Converse of Sievers' law と呼び (以後 Converse と略す)、Lehmann (1955:361)、Fullerton (1977:7ff.)、Harðarson (2017:935–936) もこれを音変化として認めている。しかし Murray (1988:248ff.) は弱変化動詞 1 類における **-ij->*-j-* は音変化ではなく、primary verb への類推によるものであると主張している。その根拠としてまず Murray (1988:252–253) は i-語幹名詞の短語根形 **dani-* ‘Dane’、**wini-* ‘friend’ の属格複数 *Deni(ǵ)a*、*wini(ǵ)(e)a* を取り上げ、この 2 例は基底レベルでは、*ja-*、*jō-* 語幹のような子音重複を引き起こすはずの **dan-j-ō*、**win-j-ō* (>**Denna*、**winna*) ではなく、Converse がなかったからこそ **-ij-* が存続していた **dan-ij-ō*、**win-ij-ō* であったとしている。*wini(ǵ)(e)a* について Campbell (1959:164) は、i-語幹名詞の属格複数では **-i-* は短語根の後位置でも **-j-* とならず i-語幹としての本来の **-i-* を保ったため、子音重複を引き起こすこともなかったなかつたとしている。あるいは Syrett (1998:90) の論述を踏まえ、**win-i-ō* が **-i-* の完全なわたり音化と子音重複を経たあたかも *ja-* 語幹形 (**win-j-ō*) **winn-j-ō* に由来するかのような **winna* にいったんはなったものの、あくまでもそれは i-語幹名詞 **wini* の変化表の中の一員であった以上、本来の i-語幹形へと類推的に戻された (**win-i-ō*) **win-ij-ō* の反映のような *wini(ǵ)(e)a* となったとも考えられる。だとすれば、同じことは *Deni(ǵ)a* にも当てはまることになる。従って *Deni(ǵ)a*、*wini(ǵ)(e)a* が Converse への決定的な反証となるとは考えにくい。

Murray (1988:256ff.) はさらに Converse への反証として i-語幹名詞の短語根形 (Gmc **nawiz*) *Go náus* ‘corpse’ の主格複数 *naweis* を挙げており、後続の *-eis* [-is] は (IE **-ei-* + 主格複数語尾 **-es*) IE **-ejes* (Skt *-ayas*) に由来し、これが Gmc **-ijiz* を経て *Go -eis* となったとされる。すなわち j-動詞の短語根形 *Go nasjis* ‘you save’ における (IE **-ejesi*) Gmc **-ijizi* > *Go -jis* とは異なり、*naweis* では i-語幹名詞の主格複数語尾 Gmc **-ijiz* は短語根の後位置にあっても Converse を経た *Go -jis* とはなっていない。i-語幹名詞の **-ijiz*、j-動詞の **-ijizi* はこの場合どちらも短語根の後位置でありながら、後者は *Go -eis* ではなく *-jis* となっている点について Murray (1988:258) は、後者は規則的な音変化としての Converse を反映するものではなく、primary verb への類推に起因するとしている。この主張を踏まえると、*Go nasjis* については **naseis* となるのが本来の発達であるが、そうならないのは *Go hafjis* ‘you raise’ (OE *hef(e)st*) のような primary verb の短語根形への類推が働いたことになる。しかし Syrett (1998:90–91) は、i-語幹名詞の短語根後位置の Gmc **-ijiz* が Converse を反映しない *Go -eis* となっているのは、Converse に先立ち末尾の **z* の前位置の **i* の消失により **-ijz* > **-iz* を経て *Go -eis* となったためである可能性もあるとしている。あるいは後続の *Go -eis* は Gmc **-ijiz* の反映ではなく、その基底構造としては (IE **-ei->*) *-i-* + 主格複数語尾となっていたからかもしれない。従って *naweis* も Converse への決定的な反証となるとは考えにくい。

さらに Murray (1988:259) は、*Go nasjan* の命令法単数 (IE **noséje* > Gmc **nazeje* > **nazije*) が j-接尾辞のない長母音 *-ei* を有する *nasei* となっていることも Converse への反証になるとしている。なお *Go nasjan* の語根末子音につ

いては、ヴェルネルの法則により OE *nerian* に反映される WGmc *r* に至る前段階の *z* となるのが本来の発達であるが、実際にはそうっていないことについて Krahe & Meid (1969⁷:120) は、この使役動詞のもととなった自動詞の反映形である強変化動詞 5 類の e-階梯形 *ganisan* ‘to be saved’ (OE *ġenesan*) の、もともとの語根末子音 *s* への類推によるものであるとしている。

また Fullerton (1977:12) は、Go *dōmei* ‘judge’ (OE *dēm*)、*sōkei* ‘seek’ (OE *sēc*) のような命令法単数の長語根形の末尾の *-ei* は Sievers の法則による (**-ji*>) **-iji* が **-ij* を経て規則的に *-ei* [-*i*] となった結果であるとしており、Murray (1988:259) も同じ見方をしている。そしてさらに Fullerton (1977:13) は、短語根形が *nasei* ように *-ei* を有しているのは長語根形からの影響によるものとしている。しかし長語根の後位置に長母音 [-*i*] が残っていること自体が果たして本来の規則的音変化によるものと言えるのであろうか。Murray (1988:259) 自身もこの命令法単数でのようにゴート語の末尾の *-ei* が *-i* に短化されずに維持されているのは例外的であるとは認めながらも、あくまでもこれは **-ije*>**-je* への Converse が起こることはなかったことを示す残存形であると主張している。しかしこの命令法単数語尾 *-ei* については *nasei* のような短語根形だけではなく *dōmei*、*sōkei* のような長語根形の場合も実は不可解と言えるであろう。

dōmei、*sōkei* が本来の規則的な発達形とは思えないことを示唆する例として ja-語幹名詞の Go *hairdeis* ‘shepherd’ の対格と呼格の単数 *hairdi* を挙げてよいであろう。もし命令法単数の長語根形の末尾の *-ei* が Murray (1988:259) の主張どおり Sievers の法則に起因するものであるなら、同じく Sievers の法則に起因する (Gmc **-jan*>Gmc **-ijan*)>**-i*、(Gmc **-je*>Gmc **-ije*)>**-i* をかつてそれぞれ有していたはずの ‘shepherd’ の対格と呼格の単数は実際の *hairdi* ではなく **hairdei* となっていたはずである。すでに Wright (1910:73) も *sōkei* を対格単数と呼格単数である *hairdi* と比較したうえで述べているように、*sōkei* は本来の音韻法則に反した二次的な発達形であり、ゴート語としては **-i* が短化して **sōki* となるのが本来の発達ではないだろうか。また Krahe (1967⁷:142) も命令法単数 *-ei* と ja-語幹名詞の呼格単数の *-i* とのこうした不一致を疑問視している。さらに Wright (1910:73)、そして Krahe & Meid (1969⁷:132) も主張しているように、同じことは *sōkei* だけでなく *nasei* のような短語根形にも当てはまるのであり、*nasei* についてもその本来の発達形は **nasi* であったはずである。

このように (Sievers の法則の結果を有した Gmc **sōkije*>) Gmc **sōki* からの本来の発達形は実は *sōkei* ではなく **sōki* であったはずである一方、実は OE *sēc* も (Sievers の法則の結果を有した **sōkije*>) Gmc **sōki* が WGmc **sōki* を経て *sēc* となるという規則正しい音過程の結果であったと考えられる。このことは前記の Gmc **bandi*>Go *bandi* ‘fetter’、Gmc **bandi*>WGmc **bandi*>OE *bend* という音過程からも裏付けられるであろう。Ringe & Taylor (2014:70) も認めているように、IE **-jH₂*>**-iH₂* に由来する **bandi* の末尾の Gmc **-i* のみならず、Sievers の法則を経た命令法単数 Gmc **sōki*、**dōmī* における **-i* もまた長語根の後位置では WGmc **-i* に短化されたのちに *i*-ウムラウトを引き起こし消失した結果が OE *bend*、*sēc*、*dēm* であったと考えられる。これに対し、OE *hierde* (Go *hairdeis*)、*ende* ‘end’ (Go *andeis*) のような ja-語幹名詞の長語根形の場合、Gmc **herðijaz*、**andijaz* から **-az* が消失して WGmc **hirdi*、**andi* となった。すなわち ja-語幹名詞の長語根形がこのように **-i* を有するようになった時期は OE *bend*、*sēc*、*dēm* が Gmc **bandi*、**sōki*、**dōmī* のようにかつて **-i* を有していた時期よりもずっと後期であったため、WGmc **hirdi*、**andi* の **-i* は初期の古英語でいったん **hiordi*、**andi* のようにそのまま維持されて *i*-ウムラウトを引き起こし、のちに *-i* に短音化されたものの消失は免れて *hierde*、*ende* のように *-e* として残った。そしてもし仮に古英語にも呼格単数 Go *hairdi* に対応する呼格単数が存在していたならば、それは Gmc **herðije*>**herði*>WGmc **hirdi*>OE **hiordi*>**hierd* となっていたはずである。従って *j*-動詞の命令法単数の長語根形 OE *sēc*、*dēm* は Gmc **sōki*、**dōmī* から WGmc **sōki*、**dōmī* を経た規則的な発達である一方、短語根形 OE *nere* ‘save’ の場合、(IE

*noséje>) Gmc *nazje から Converse を経た Gmc *nazje が WGmc *nari を経て neri、そして nere となったものと考えられる。他方、OE sēc とは異なり、末尾に -i を有する命令法単数 OS sōki、OHG suochi は Sievers の法則とは無関係で本来の発達形ではなく、neri のような短語根形からの、あるいは直説法現在 2 人称単数 sōkis、suochis からの影響によるものであろう。

そして前述のように Go dōmei、sōkei のような末尾に長母音 -ei を有する例は本来の規則的な発達とは考えにくく、この -ei の由来の 1 つの可能性としては、Wright (1910:73)、Seebold (1972:75) が述べているように、sōkeis、dōmeis のような同じく直説法現在 2 人称単数の長語根形からの影響が考えられる。

以上のことから、Converse への反論として Murray (1988) が主張した内容が Converse を否定するだけの十分な証拠となるとは考えにくい。従って弱変化動詞 1 類のうち名詞由来の動詞と使役動詞がゲルマン祖語ではいずれも語根後位置に *-ij- を有するという状況に移行し、さらに語根後位置に IE *-j- がじかに後続していた primary verb 由来のものとは完全に一致して語根後位置には一律に Sievers の法則のみによる (*-j->) *-j-~*-ij- という分布を有するようになったのは primary verb の影響によるものではなく、Sievers の法則がさらに Converse of Sievers' law という形で継承され徹底された結果であったと言えるであろう。そしてこのことがさらに (IE *sodéjonom>) Gmc *satijanan>*satjanan>WGmc *sattjan (>OE settan 'to set') のように Converse により生じた (*-ij->) *-j- が西ゲルマン語の子音重複へとつながり、また古英語ではさらに (IE *loghéjonom>Gmc *lagijanan>*lagjanan>) WGmc *laggian>OE lečgan 'to lay' のように、西ゲルマン語の子音重複により生じた -gg- の硬口蓋化 (>çg) にもつながっている。

Converse と思える現象は実は音変化ではなく、primary verb への類推が引き起こした現象であるというのが Murray (1988) の主張だったのであるが、primary verb の中には確かに使用頻度の高かったと思われるものは少なくはないものの、それだけでこうした類推の大きな波になりえたのかどうかは疑わしい。

他方、名詞由来の動詞と使役動詞がこのように primary verb と同じ状況に至った要因については、Converse や primary verb からの影響以外にありうるかもしれないこととしては次のようなことも考えられる。それは primary verb 以外の j-動詞は短語根形と長語根形のいずれの場合もすべて過去形と過去分詞では歯音接辞の前位置にある基底レベルの *-j- (j-接尾辞) が母音化した反映 *-i- を共通に有していたことである (*dōm-j-ð-/、*/naz-j-ð-/>Go dōmida、dōmiþs、nasida、nasipþs、OE dēmdē、dēmed、nerede、nered)。そしてこの共通点が基底レベルで、短語根形の現在時制における (IE *-ej-、*-éj-、*-ij->) *-ij- を過去形と過去分詞の歯音接辞の前位置の *-j- に同一化して統一しようとする強い同調圧力となりえたかもしれない。そしてさらに考えられる要因としては、j-接尾辞を有していた名詞と形容詞の ja-、jō- 語幹形が Sievers の法則による本来の規則的な交替 (*-j->) *-j-~*-ij- を維持していたことが品詞の枠を越えて影響力を及ぼしていたかもしれない。そしてさらに Murray (1988) が主張する primary verb からの影響も一要因として加わっていた可能性も否定はできないかもしれない。

そして長語根形の直説法現在 2、3 人称単数は、Go wōpjan 'to call'、waurkjan 'to work' (この 2 者はともに primary verb に由来する)、dōmjan の場合、wōpeis、wōpeiþ、waurkeis、waurkeiþ、dōmeis、dōmeiþ のように語根後位置に Sievers の法則を反映する長母音 ei [ī] を有するのに対し、古英語のその対応形では対照的に語根後位置の母音要素が失われた wēpst、wēpp、wyrçst、wyrçp、dēmst、dēmp となっている。しかし Sievers の法則による Gmc *-iji- は Gmc *-i- となり、いったんはそのまま WGmc *-i- として引き継がれていたと考えられる。このことは Gmc *-i- を同様に維持する OHG beran 'to bear' (OE、OS beran) の仮定法過去 2 人称単数 bāris (Go bēreis) から明らかであるが、古高地ドイツ語の長語根形の直説法現在 2、3 人称単数では本来の *-i- ではなく短母音 -i- を有する wuofis、wuofit、wurchis、wurchit、tuomis、tuomit となっているのは、*-i- が neris 'you save' のような短語根形からの影響を

受けたためであろう。他方、OS *wōpid*, *giduomis* における *-i-* が **-i-* の短化という規則的な音変化の結果であることは假定法過去 2 人称単数 OS *bāris* (OHG *bāris*) から明らかであろう。そして古英語の *j*-動詞の短語根形の直説法現在 2、3 人称単数では **-jis*、**-jip* は西ゲルマン語の規則的な音変化による **-is*、**-ip* を経て、強変化動詞の *j*-現在動詞以外のもの (*fær(e)st* ‘you go’, *fær(e)þ* ‘he goes’) と同様 *-(e)st*、*-(e)þ* (*frem(e)st*, *frem(e)þ*) となった一方、長語根形においても (Gmc **-ijizi*、**-ijiði*) **-is*、**-ip* は古サクソン語と同様、あるいはむしろ北海ゲルマン語としての **-i-* の規則的な短化による **-is*、**-ip* を経て強変化動詞の *j*-現在動詞以外のもの (*tīchst* ‘you draw’, *tīchþ* ‘he draws’) と同じく *-(e)st*、*-(e)þ* (*wēpst*, *wēþþ*, *wyrčst*, *wyrčþ*, *dēmst*, *dēmþ*) となったものと考えられる。

V. 結びにかえて

ゲルマン祖語の *j*-接尾辞に関連した音変化のうち、本稿で主に注目して取り上げたのが西ゲルマン語の子音重複と Sievers の法則であった。子音重複もすでに古英語期以前の段階で起こっていたが、古英語の段階に入ってからそれが古英語の音韻体系や語形変化に与えた影響は決して小さなものではなかった。*j*-接尾辞の前位置での子音重複の原因については Murray & Vennemann (1983) が提案した音節接触法則により概ね説明がつくと思われる。そして古英語では *r* の *j*-接尾辞の前位置での子音重複が見られないことについてもこの音節接触法則で説明できる一方、音節接触法則において *r* よりも子音強度が低い、すなわちきこえ度の大きいとされた *w* の *j*-接尾辞の前位置での子音重複が実はこの音節接触法則に反し起こっていたと考えられるのである。そこで Suzuki (1989) が実は *w* は流音 *r*、*l* よりも子音強度が高い、すなわちきこえ度の低い子音であったことを示唆するような根拠を挙げ、音節接触法則に若干の修正が必要であることを示した点は注目すべきであろう。

しかし Suzuki の挙げた **iwj* > **iwwj* のケースとは異なり、**awj* における *w* の子音重複による **awwj* が古英語ではなぜか子音重複とは無関係な **auj* の反映としか思えないものとなっている。この点について Ringe & Taylor (2014) は、基底の **awj* が子音重複により表層ではいったんは WGmc **awwj* とはなったものの基底では **awj* が維持され、古英語ではのちにそれが表層では **auj* (> OE *ieġ*, *ēġ*) となり、**awwj* の反映が表面化することはなかったとしている。**awj* における *w* の子音重複を古高地ドイツ語については認めながらも古英語では **auj* は **awj* の反映であるとした Ringe & Taylor (2014) の主張は注目には値するが、こうしたことがなぜ **iwj* ではなく **awj* に起こったのか、あるいはそれが **iwj* にはまったく起こらなかったと言い切れるのか、などの疑問は残る。

また古英語では *ja*-語幹名詞の主格と対格の単数と *ja*-語幹形容詞の男性主格単数と中性主格・対格単数を除き Sievers の法則の痕跡をじかに確認することは一見不可能のように思えるが、*aetgāēru*、*wildu* のような *jō*-語幹の名詞と形容詞の主格単数、*witu*、*wildu* のような中性 *ja*-語幹名詞と形容詞の主格と対格の複数のような末尾に *-u* を維持する形こそが実は Sievers の法則によるかつての (**-jō*) **-ijō* の存在を間違いなく示唆するものであろう。

子音重複と Sievers の法則が古英語の *ja*-、*jō*-語幹名詞と形容詞に残した痕跡は決して小さなものではなかったが、*j*-動詞にはゲルマン祖語の段階で Sievers の法則が与えたと考えられる影響の痕跡は古英語ではすでに失われていたようであり、Sievers の法則を色濃く反映するゴート語とは状況が対照的である。しかし *ja*-、*jō*-語幹名詞と形容詞の場合と同様、Sievers の法則の生起以降の *j*-接尾辞が引き起こした *i*-ウムラウト、子音重複、硬口蓋化の痕跡ははっきりと確認できる。また *j*-接尾辞そのものも *nerian*、*herġas* のような *r* で終わる短語根形のほか、*strēgan*、*hieġe*、*ieġ* のような **auj* を反映するものにははっきりと残っている。

j-動詞については、主に Sievers の法則による (**-j-*) **-j-* ~ **-ij-* の交替と西ゲルマン語の子音重複の有無を出発点として論じることでその成り立ちの輪郭を把握することはほぼ可能であると思われる。しかしさらにこの出発点

と思える段階に到達したのは、名詞由来の動詞と使役動詞における接辞であった IE *-ej-, *-éj-, *-ij- に由来する Gmc *-ij-が primary verb におけるもっぱら Sievers の法則に起因していた (*-j->) *-j-~*-ij- の交替と融合したためと考えられるのであり、その融合を導いたとされるプロセスが Converse of Sievers' law と呼ばれるものであった。

Murray (1988) は、弱変化動詞 1 類の名詞由来のものと使役動詞の短語根形の現在時制における構造が primary verb のそれと完全に融合していることについて、Converse の結果であるとする多数派の見解を認めず、Converse への反証として一部の i-語幹名詞を挙げているが、それが決定的な反証となるとは考えにくい。またその融合の原因について Murray (1988) は Converse ではなく primary verb への類推によるものと主張しているが、primary verb の中には確かに使用頻度の高かったと思われるものは少なくはないものの、それだけでこうした類推の大きな波になりえたのかどうかは疑わしい。

そして j-動詞は短語根形では *nerian* や *strēgan* のようなケースを除き j-接尾辞はその原形を留めることはなく、また命令法単数、過去形、過去分詞では j-接尾辞は i に母音化され、さらに弱化した反映 e を留めているに過ぎず、長語根形の過去形ではこの弱化した反映 e すらも留めていないケースがほとんどである。そして命令法単数の長語根形についてもゴート語、古サクソン語、古高地ドイツ語のそれとは異なり、古英語形は *sēc*、*dēm* のように無語尾となっているが、通時的に見れば、それは Sievers の法則とは無関係であったわけではなく、Sievers の法則によるかつての (Gmc *-je>) Gmc *-ije>Gmc *-ī が WGmc *-i を経て消失するというむしろ規則的な音変化の結果であり、二次的な影響を一切受けていない本来の規則的な発達形に他ならないと考えられる。

【付記】本論文に関しましては、開示すべき利益相反事項はありません。

文献 (References)

- Adamczyk, E. 2001. "Old English reflexes of Sievers' law." *SAP* 36: 61–72.
- Bammesberger, A. 1986. *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Edgerton, F. 1934. "Sievers' law and IE weak-grade vocalism." *Language* 10: 235–265.
- Fulk, R. D. 2018. *A comparative grammar of the early Germanic languages*. Amsterdam-Philadelphia: Benjamins.
- Fullerton, G. L. 1977. *Historical Germanic verb morphology*. Berlin-New York: de Gruyter.
- Harðarson, J. A. 2017. "The morphology of Germanic." In: *Handbook of comparative and historical Indo-European linguistics*. Vol. II, ed. Klein, J., Joseph, B. & M. Fritz, 913–954. Berlin-Boston: de Gruyter.
- Hogg, R. M. & R. D. Fulk. 2011. *A grammar of Old English*. Vol. II: *Morphology*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Krahe, H. 1967². *Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen*. Heidelberg: Winter.
- Krahe, H. & W. Meid. 1969⁷. *Germanische Sprachwissenschaft*. Vol. II: *Formenlehre*. Berlin: de Gruyter.
- Krause, W. 1968³. *Handbuch des Gotischen*. Munich: Beck.
- Kroonen, G. 2013. *Etymological dictionary of Proto-Germanic*. Leiden-Boston: Brill.
- Lehmann, W. P. 1955. "The Proto-Indo-European resonants in Germanic." *Language* 31: 355–366.
- Murray, R. W. 1986. "Urgermanische Silbenstruktur und die westgermanische Konsonantengemination." *PBB* 108: 333–356.
- Murray, R. W. 1988. *Phonological strength and early Germanic syllable structure*. Munich: Fink.

- Murray, R. W. & T. Vennemann. 1983. "Sound change and syllable structure in Germanic phonology." *Language* 59: 514–528.
- Ringe, D. & A. Taylor. 2014. *The development of Old English*. Oxford: Oxford University Press.
- Seebold, E. M. 1972. *Das System der indogermanischen Halbvokale*. Heidelberg: Winter.
- Suzuki, S. 1989. "On determining the sonority value of /w/ relative to /t/ and /l/ in early West Germanic." *FLH* 10: 21–34.
- Syrett, M. 1998. "On Sievers' law, and its converse, in North Germanic." *NOWELE* 34: 75–98.
- Wright, J. 1910. *Grammar of the Gothic language*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.